

美しき野獣

2006(平成18)年2月19日鑑賞(パラダイスクエア)

★★★★



監督・共同脚本＝キム・ソンス／出演＝クォン・サンウ／ユ・ジテ／オム・ジウォン／ソン・ビョンホ／キム・ユンソク／カン・ソンジン／チェ・リョン／イ・ジュシル／イ・ジュンムン（東芝エンタテインメント配給／2005年韓国映画／125分）

……撮影中とともに30歳の誕生日を迎えたという青春スターのクォン・サンウと演技派ユ・ジテの共演だが、その役柄は野獣のような刑事とクールで知的な検事。この全く正反対の2人が巨大な悪の組織の摘発に執念を燃やすというストーリーだが、結末は何とも意外な方向に……？ 『美しき野獣』というタイトルがピッタリの映画だが、さて韓流ファン、クォン・サンウのファンのおばちゃんたちは、こんなハードボイルドな映画をどう採点するの……？

イメチェンしたクォン・サンウに注目

日本でテレビ放映された韓国ドラマ『悲しき恋歌』『天国への階段』や近時日本で公開された映画『マルチュク青春通り』（04年）や『恋する神父』（05年）で、人気沸騰しているのがクォン・サンウだが、彼のイメージは「制服の似合う青春スター」というもの。しかし、この映画でソウル警察の中部署捜査課のチャン・ドヨン刑事を演ずるクォン・サンウは、顔を浅黒くメイクし、ひげをたくわえて、髪はボウボウ、そして服装も薄汚れたもの。はみ出し者の、熱血（暴力？）刑事風に一挙にイメチェンだ。

韓国映画の楽しみ方にはいろいろあるが、クォン・サンウファンのおばちゃんたちには、まずこの点が興味の対象だろう。しかして、スクリーン上でその顔を観たあなたの採点は……？

持ち味を徹底させたユ・ジテは……？

他方、『オールド・ボーイ』（03年）や『南極日誌』（05年）で、若手演技派俳優としての地位を固めているのがユ・ジテ。クォン・サンウと対照的に、あくまでクールに、しかし徹底的に法的手段を駆使して組織犯罪を追い詰めることに執念を燃やす、ソウル中央地検のオ・ジヌ検事役を演じている。そもそも、こんな性格も捜査のやり方も全く正反対のチャン・ドヨン刑事とオ・ジヌ検事が協力し合って捜査にあたることは考えられない話。しかしそれを可能とし、アッと驚く結末にもっていくのが、脚本の冴え。

今年1月16日のライブドア本社への強制捜査に始まった証券取引法違反の捜査を見ても、あるいはかつてのロッキード事件やリクルート事件などの捜査を見ても、日本の検察庁特捜部による犯罪捜査のやり方は、私にはある程度理解することができる。しかし、歴代の大統領が退職後に逮捕されるのが常（？）という韓国のそれは、私にもなかなかわからない。

『インファナル・アフェア』3部作は、警察によるマフィアへの潜入捜査官の送り込みと、これに対抗したマフィアからの警察組織へのスパイの送り込みというものすごいテーマで、これを観ていてホントにそんなことがありうるのと思ったが、韓国では検察庁の内部に通報者がいるなどということがホントにありうるの……？

もしそんなことがホントだとしたら、家庭生活を犠牲にしてまで、組織犯罪の摘発に執念を燃やしているオ・ジヌ検事は実に気の毒だが……。

脚本の面白さはどこに……？

この映画の脚本を書いたのは、パク・チャヌク監督らの下で助監督をつとめてきたキム・ソンス（『武士（MUSA）』のキム・ソンス監督とは同姓同名だが全くの別人）。パンフレットによれば、彼が映画会社に持ち込んだシナリオを読んだクォン・サンウがこれを気に入り1日ですぐにやると決めただけか、ユ・ジテも同様に1日で出演を決めたとのこと。

この脚本が映画向きとして面白いのは、何ととってもチャン・ドヨン刑事と

オ・ジヌ検事という2人の男の突出したキャラであり、その面白さに複雑なストーリー性と重厚な人間ドラマ性を与えたのは、後述のソン・ビョンホを中心とした悪役陣の充実ぶり。もっとも、はっきり言ってこの映画のストーリー展開はかなり複雑。そして、日本人観客には例によって、韓国人俳優の顔と役名がなかなか一致しないから、よけいにわかりにくい面がある。したがって、人間関係などは図に書いて整理するくらいの勉強が必要。

もっとも、物語の細部の理解は別として、キム・ソンスが書いたこの脚本の最大の特徴は、「勧善懲悪」の結末になっていないこと。つまり、熱血刑事（暴力刑事？）のチャン・ドヨンと、知的でクールな検事オ・ジヌ（途中から少し変身？）が、力を合わせて苦勞の末に巨大な犯罪組織を摘発し、めでたしめでたし、というストーリーになっていないこと。とすると、最後に悪が勝つの？ いやいや、それは映画を観てのお楽しみに……。

ここで考えてもらいたいのは、この映画が韓国で「R指定」とされたこと。キム・ソンス監督は「これに関しては衝撃を受けています。なぜ子供たちに、世の中が間違っ回っていることを見せてはいけないのか理解できません。世の中がつねに明るく可能性に満ちているというものだけを見せても、意味がないと思いませんか？」とパンフレットの中で語っているが、さて、クォン・サンウやユ・ジテ主演の映画が、なぜ「R指定」……？

チャン・ドヨン、オ・ジヌの上をいく悪役に注目！

悪役の中心人物はクリヨン組の会長であるユ・ガンジン（ソン・ビョンホ）。悪の組織はクリヨン組の他にもドガン組があるが、ドガン組は今や完全にユ会長の傘下に。

3年前に白骨死体で発見されたのが、前のドガン組の組長であったヨンシクだが、ヨンシク亡き後、ドガン組の組長を継いだのがヨンチョル（カン・ソンジン）。そして今や、ヨンチョルはユ会長に全然頭があがらない状態。またグァンチュン（チェ・リョン）はこのドガン組の幹部で、いわばさまざまな悪事の実行部隊長という役柄。

チャン・ドヨンの父親違いの弟イ・ドンジク（イ・ジュンムン）が刑務所から

出所してきたのと同じ日に出所したユ会長は、ハデハデしいお迎えをした組員たち(?)を解散させ、これからは何事も地味に地味にと……。また、脱税の罪で服役したことの反省のうえに、出所後ユ会長は慈善事業に精を出し、「これからは世のため、人のため」にと社会に対して精力的にアピール。当然こんなユ会長の表向きの肩書は実業家で、今や政界進出も視野の中に入れて、ホン議員とも協力関係に。このように彼は決してヤクザ(風)ではなく、家族に対しても優しい顔を……。しかし、その内実は……?

ユ会長が言うように、韓国は資本主義の国。したがって、現在の小泉改革下の日本におけるように「勝ち組」と「負け組」に分かれるのは当然。また、国会議員の選挙区とヤクザのシマも似たようなもの。こんなユ会長の存在感は抜群で、一匹の野獣のような刑事だけでは到底太刀打ちできない相手。しかし、オ・ジヌ検事による組織あげて(?)の捜査の結末は……?

ストーリーのポイントを3点だけ

前述のようにこの映画の脚本はよくできているが、物語は複雑でわかりにくい。そこで大きなお世話ながら、私の頭の中を整理する意味を含めてストーリーのポイントを3点だけ。

第1は、チャン・ドヨン刑事の父親違いの弟イ・ドンジクの役割。イ・ドンジクを逮捕し、刑務所へ送り込んだのはチャン・ドヨン自身だったが、誰よりもその更生を願ったのもチャン・ドヨン。しかし、イ・ドンジクは刑務所の中で、同じく刑務所に収監されていたユ会長の「連絡係」をしていたらしい。そこで出所後、母親(イ・ジュシル)の手術代を稼ぐために彼がとった行動が、大きな悲劇を生むことに。

第2は、ドガン組の前組長ヨンシクを3年前に殺したのは誰かということ。そんな時に1番最初に疑われるのは、後ガマを継いだ人物で、それがヨンチョル。オ・ジヌ検事はそれをポイントに組織全体の壊滅を目指していたが、そこにはさらにさまざまなカラクリが……。

第3は組織犯罪には金がつきものだが、巨大な利権に絡むカネを生み出すのは、韓国も日本も同じく公共事業。この映画ではそれが巨大なショッピングモールの

開発権。政官業一体となった巨大な公共事業の陰でうごめく人間模様、というのが、最もわかりやすい事件の構図……？

ユ会長の誤算は？

いくら緻密な計画を立てていても、たくさん人間が絡んで動くことになれば、たまに誤算が生まれることはやむをえない。そこで、ユ会長の計画にもいくつかの誤算が生じることに……。

第1の誤算は、イ・ドンジクがヨンシク殺害に関する重要な情報があると言って、ヨンシクの未亡人に多額の金を要求しにきたこと。そのため、イ・ドンジクは口封じされることになるが、その現場に現れたチャン・ドヨンは、その犯人がグァンチュンだと確信した。

第2は、イ・ドンジクの口封じだけではヤバイとみたユ会長は、グァンチュンに命じて、現実的にヨンシク殺害を実行した元ドガン組のギテクの口も封じようとしたが、そこにチャン・ドヨン刑事が登場したこと。その他いくつかの誤算が誤算を呼び……？

オ・ジヌ検事の誤算は？

他方、緻密で理づめの捜査を進めているオ・ジヌ検事にもいくつかの誤算が……。その第1は、ショッピングモールの開発権を獲得したイリヤン建設の社長がユ会長と縁戚関係にあることを探り当て、イリヤン建設の家宅捜索にこぎつけたにもかかわらず、ユ会長が検察の上層部に圧力をかけ、またホン議員を脅迫して意見陳述を断念させたこと。

第2は、ヨンチョルを逮捕し、その自供を引き出すことによって、遂にユ会長の逮捕までこぎつけたにもかかわらず、そこで発生した驚くべき事実。何とこれもすべてユ会長が仕組んだことらしいがホントにそんなことができるのかとビックリ……。

第3は、いったん逃亡していたヨンチョルが何とすぐに自首してきたうえ、今度はチャン・ドヨン刑事とオ・ジヌ検事に暴力で自白を強要されたと訴えてきたこと。オ・ジヌはともかく、チャン・ドヨンの行動はまさに暴力による自白強要

そのものだから、こうなるとそりゃヤバイ。

逮捕する側にあるはずのチャン・ドヨン刑事とオ・ジヌ検事がともに逮捕・拘留されたうえ、刑事裁判を受けているサマは何とも惨めだが、さてここからの挽回策はあるのだろうか……？

今回の美女はチョイ役のみで……

この映画はクォン・サンウとユ・ジテの2人を主人公に据えたハードボイルドタッチのものだから、基本的にオンナは不要。

そう徹底させて女優の登場をゼロにしてもいいのだが、それで男性客が減ったのではたまらない。そこで、キム・ソンス監督が脚本を書くについて、チョイ役的に登場させたのは、食堂を経営している病身の母親の面倒を見ながら、食堂を切り盛りしている心やさしい女性カン・ジュヒというもの。

キム・ソンス監督はジュヒを1人だけ登場させて、ほんの少しだけでもチャン・ドヨンの女性観や結婚観をしゃべらせることによってチャン・ドヨンのキャラの一面を観客に示そうとしたわけだ。

このジュヒ役のオム・ジウォンは、『トンケの蒼い空』（03年）や『スカーレットレター』（04年）に出演した美人女優だが、あくまでこの映画ではチョイ役に甘んじている。

したがって、出演料もクォン・サンウやユ・ジテに比べれば10分の1以下だろう。オム・ジウォンには次回の主演級での出演に期待したいものだ。

2006(平成18)年2月20日記